

平成29年度むらづくり審査講評

講評：中国四国農政局むらづくり審査会 主査 佐藤 豊信



中国四国農政局むらづくり審査会
主査 佐藤 豊信



平成29年度豊かなむらづくり表彰式
平成29年11月9日 岡山市

皆様、本日は、「農林水産祭豊かなむらづくり部門」での受賞、誠にありがとうございます。心よりお祝いを申し上げます。

審査会の委員を代表いたしまして、受賞団体ごとに審査講評を述べさせていただきます。

◆加茂谷元気なまちづくり会（徳島県阿南市）

加茂谷地域が元気なまちづくりとして本格的に動き始めたのは、加茂谷地域の各代表者が集まり、この地域の将来像についてワークショップを開催し、真剣に自分達が直面する困難な問題をどのように解決するか正面から向き合い、お互いに議論を重ねた、その時がスタートした時点だと考えます。その加茂谷元気なまちづくり会の活動は、農業部会、遍路道部会、すきとく市部会、女性部会の4本柱から構成されています。

農業部会で特に注目すべきところは、東京、大阪都市部での就農誘致イベントに出展し、農家が自らの地域をPRしていることです。希望者には加茂谷体験ツアーに参加してもらい、農作業体験や空き家・空き農地の紹介をおこなって、移住就農家族の全面的サポートをおこなうなど手厚い対応をしています。都市部から加茂谷への移住者の定着率が高いことの秘策を聞くと、面接の時に人物評価を十分におこない、この人なら大丈夫という人にアプローチし、加茂谷に来てもらっているということでした。自分達がじっくり時間をかけて選んだ人なので簡単には辞めていかないとのことでした。地域外の新規就農者は、農業を始めるに当たって新規の投資をしなければならないが、できるだけ初期投資を少なくして、移住し易い形に持って来ているとのことでした。その対策の一つとして、既存の農業用ハウスを再利用し、新規就農者が安定的な所得を得られるように、協議会とJAとが相互に連携して、技術的なサポート、投資面のサポート、販売面のサポートをきっちりおこなっています。移住した方も安心して農業生産を続けて生活できます。具体的な栽培作物はチンゲンサイ、イチゴ、サンチュ、ハウスすだち、ハウスみかんの5品目があり、これらを加茂谷ブランドに位置付け、販売戦略を立案しています。サポート体制の仕組みは、中山間地域の移住定住を進める上で、他の地域の参考になると思います。

すきとく市部会では、スーパーマーケットのシステムを活用し、手作り集荷施設に農産物等を集め、集荷・販売をスーパーにしてもらうことにより、老若男女問わず、小ロットから農産物の販売が可能となり、中間マージンが少ないため、利益率を高く維持して販売できる方法になっています。現段階では、それ程大きな取扱い額とはなっていませんが、将来的に農家の高齢化が進んでいく状況を考えると、特に中山間地域において、重要なマーケティング戦略になると思います。是非、この取組を成功させ、発展させていただき、これが上手くいき、情報発信

されると、他の全国の中山間地域でも取組を始めるのではないかと考えています。

遍路道部会の取組は、地域の人々の人と人とのつながりを維持するための社会的な活動と捉えることができます。遍路道部会の活動によって、この地域の人々の心のつながりや精神的なつながりが強くなっていると感じました。最初は説明を聞いても理解できませんでしたでしたが、遍路道部会の方と個別にお話すると、熱っぽくお話をされ、これだけの情熱を持って地域の遍路道を管理すること、地域の人みんなが協力してやれていること、その結びつきの強さがこの地域の農業も含めて地域全体の活性化に大きい役割を果たしていると思います。

女性部会は各部会と連携して、イベント時には軽食や加工品を提供し、子ども達への食育活動にも積極的に取り組んでいます。女性同士の情報交換や日頃の忙しさからの気分転換にもなっているということで、元気の源を生み出す活動となっています。さらに、都市部にある大学生の農業インターンシップにも積極的に取り組み、若い学生達と一緒に作業し、楽しく話をすることが、地域の人々にとっても良い刺激になり、大雨被害の後に学生達に助けてもらったということが皆さまの心の中に残っていて、その感謝の気持ちが、今も村づくりを続けていこうという原動力の一つになっています。

これら4つの部会が緊密に連携を取りながら活動することにより、加茂谷地域全体がバランス良く動いています。今後とも益々の発展を期待したいと思います。

◆からり直売所出荷者運営協議会（愛媛県喜多郡内子町）

当日、審査会場では全員が黄色い法被を着ておられ、その法被を通して出てくる元気オーラを感じました。この地域は大いに期待できるなと思いながら、お話を聞かせていただきました。

本協議会の歴史は、昭和61年から始まった知的農村塾における学習を通じ、考える力と行動する力を身につけ、そうした力を結集し直売所の活動が始まりました。この活動は、美しい内子町の町並み景観を復活していくという市民運動とリンクしており、農業・農村を活性化させ豊かな農村生活を築くことに繋がっていききました。重要なことを成すには、多数の人々の心を結びつけるための根幹となる思想とか人生の価値観、更に言えば哲学といったものが、しっかりと構成メンバー間で共有されていることが大変重要であります。その根幹を形成したのが知的農村塾であり、すばらしい知的財産が伝承されています。具体的な取組として

は、農産物のブランド化、農産物の地域内循環、そして女性の自立が主軸に据えられてきました。そして知的農村塾のすばらしさは、開塾以来すでに30年が経過したにも関わらず、意欲ある塾生を排出し続けていることにあります。地域として新たな人材を継続的に育て続けるシステムが存在しています。地域の皆様が努力して来られたからこそ続けていくことができたと思います。平成6年に農村女性の自立の場として、特産物直売所が開設され、様々な問題点を解決し今日に至っています。こうした活動の積み上げが、からり直売所出荷者運営協議会活動の礎となっています。そして、現在の「内子フレッシュパークからり特産物直売所」が開設され、平成18年からは指定管理制度により「(株)内子フレッシュパークからり」となっています。

村づくりの推進体制は 400人をこえる出荷者で構成される運営協議会がベースとなっています。この協議会は農林業者だけでなく非農家も参加し、特に若い女性や農業者を役員として積極的に登用しています。そういった考え方が大変重要で、また重要な意思決定を任せていることも、注目に値します。運営協議会の会員の家族経営協定締結割合は町内で86%の高い割合を占めています。女性の意欲とやりがいとが積極的な経営参画を実現させ、この経営参画が直売所の成功の要因になっています。

平成6年に農産物直売所として、「内の子市場」を立ちあげ、その後、農産物直売所の特性をもっと活かすことを計画し、「からり直売所」をオープンさせ、売上額は4億円を超えるまでに発展しました。「からり直売所」では直売所におけるIT導入の先駆的な事例ともなっており、低農薬・減農薬野菜生産に取り組み、その栽培履歴をQRコードで簡単に見ることができるようにする等、農産物の品質の安全保証に積極的に取り組み、消費者に安全安心をアピールする等の斬新な取り組みをされている点も大変高く評価できます。

さらに農業参入希望者を積極的に受け入れ、新規就農者の育成にも取り組んでいます。山間部の耕作条件の厳しい所にも、若い新規就農者の方が就農してきています。彼らが積極的に新しい農業技術を取り入れ、チャレンジングな農業生産に取り組んでいるところもすばらしく、彼らを支える地域の皆様の人の輪があってこそ、それが可能となっていると思いながら現地を見させていただきました。平成12年からは町内の病院や学校給食センターへ農産物を供給しており、農産物の地域内循環の輪も広がっています。

次に将来、我が国の農村で直面する高齢化問題への取組として、高齢農家への

農産物の循環集荷をおこない、高齢者の買い物支援にも取り組もうとしています。このように、農業生産や農産物のマーケティング、農業の6次産業化への取組だけでなく、農村の抱える高齢化問題へ対応可能な革新的な取組など、未来の農業・農村問題解決に取り組む村づくりとなっています。農産物販売の方は注目をされますが、このような農村を支える構造的な社会問題までもひっくるめて解決するような取組をなされているのは、大変斬新で素晴らしいと思います、現地を視察させていただきました。

本協議会の歩んできた歴史は、作るだけの農業から頭を使う高次元農業へ、そして豊かな農村生活を実現するための取組を地域の皆様の協力と工夫により、成功に導いてきた道程、道筋、あるいは軌跡であったとすることができます。お話を伺う中で、皆様が劇場で演劇をされ、全員で大きな声で「頑張ろう、からり」と力一杯発声をされたとお聞きしました。私は、皆様が一緒になって大きな声で「頑張ろう、からり」と発声したことが、心の中でずっと暖かい炎として燃え続けていると思います。我々が最初にお伺いした時に、黄色い法被の下から透けて出てくるエネルギーを感じたのは、まさにそのような歴史があってこそだと思います。そういう形でずっと、大切な言葉が心の中で燃え続けていると思います。その火が燃え続ける限り、からりは不滅だと確信しました。

本日は2地区とも受賞、誠におめでとうございました。もっと素晴らしい点もたくさんありますが、時間の関係で省略させていただきました。是非この受賞を期に、今後とも更に発展していただければと願って止みません。本日は本当におめでとうございました。

中国四国農政局むらづくり審査会

主査 佐藤 豊信